

## 大学での「多言語活動」授業の取り組み

—複数の言語にふれることで得られたこと—

平山 絹恵・村田 幹雄(一般財団法人 言語交流研究所)

### 1. はじめに

英語教育の低年齢化が進み、また中・高等学校、大学ではもちろん、社会人でも英語学習が求められる一方で、英語に対する苦手意識を持つ人は一定数みられる。これに対し、Morita (2019)<sup>1</sup>は、日本人の多くが人前で英語で話すときに間違いを恐れて緊張をする傾向があることと、大学生たちの多くが入学時点ですでに海外(新しい体験)に対する素朴な好奇心を失い、外国語、特に英語への興味を失うか、嫌悪感を抱いていることを指摘している。そしてこのような精神的な障壁を克服する効果的な方法の一つが、どんな発言も肯定的に受容され、心理的に安心かつ安全な多言語環境を体験することであると考へ、2014年から尚絅学院大学において、言語交流研究所の実施する「多言語活動」<sup>2</sup>を取り入れた。

本事例では上記を経て、2019年に正規の授業として言語交流研究所の複数の言語に同時に触れる「多言語活動」を導入した事例と、学生の提出レポートをもとに学生の反応や成果などの得られた効果を報告する。

### 2. まとめ

本事例は、尚絅学院大学の人文社会学類の学科の1年生の選択授業として位置づけられ、1コマ90分で全15回実施した。履修した学生は26名であった。授業に期待される成果や目標として、知らない言語に出会う体験と、参加した学生同士のコミュニケーション実践を通して、「ことば」や「多様性」について学び、世界には英語以外の言語がたくさんあり、英語一つをとっても話す人の個性があることを実感し、外国語に対して「苦手意識」をなくすこと、自らチャレンジする意欲が芽生えることを期待した。講師は仙台市の言語交流研究所の複数名の活動主催者や子供を含めた会員複数名と一緒に参加するように工夫した。

講義の内容は言語交流研究所の「多言語活動」を中軸に、オンラインとオフラインで実践の場をつくり、体験して学んでいけるようにすすめた。具体的なプログラムは、多言語の音に慣れ親しむことや実際に口に出して言う機会として、多言語ミニテストや言語交流研究所の「多言語実践活動」を実施した。また、外国語や多言語実践活動について考えるきっかけを与える位置づけとして、課題図書<sup>3</sup>の輪読や、動画やオンラインを利用した講義を実施した。学生が主体的に自分の意見を述べ、また他人の意見を聞く機会を増やし、自ら考えるきっかけづくりとして、グループワークなどのアクティビティやレポート提出を実施した。

結果、全15回の授業への参加を通して、学生のレポートから見られた意識の変化は、①外国語・ことばに対しての考え方の変容、②外国語教育についての考え方の変容、③挑戦しようという気持ちの醸成、④自分の成長・変化、新しい視点・発見に気づく、⑤友達が増え、いろいろな人と交流ができるようになった。の5つにまとめられた。今回の「多言語活動」では、文法や単語の解説などの学習は行わず、遊びの要素があることに対して抵抗感のある学生もいたようだ。しかし、授業を重ねる中で、学生自身が自然と様々な言語を比較し想像力を働かせ、考えるようになり、知らない言語に対して無関心ではなくなっていった。また、ことばに関心が向かうようになると、自然と人にも関心を向けるようになっていった。結果として、学生は「ことば」は面白いと感じるようになり、外国語で話してみようという気持ちの変化という効果を感じており、授業の目標だった、「外国語に対して「苦手意識」をなくし、多様な文化や言語に対する関心と興味を持つ」というところは、ある程度達成したかと考へる。

また、このような学生の意識変容が起こる場の特徴として、①多くの言語に触れ、実践を促す環境づくり、②プレッシャーなく実践できる場づくり、③主体的に学生が発言できるようなプログラムの工夫の3つをあげる。特に意識したのは、指導者という立場ではなく、ことばの活動を一緒に楽しむ仲間として参加することである。これにより、授業内またはグループで安心して発言できるようになったということが学生のレポートからも確認され、指導者の立つ位置が重要な役目を果たしたことが伺えた。

### 3. 今後の課題

今後の課題は、人材の育成と確保である。今回の授業の場合、言語交流研究所の研究者と子供を含めた会員が、学生たちと一緒にになり、多言語と一緒に学ぶ仲間として参加し、授業の雰囲気を作った。このような場を作る「多世代の多言語活動の経験者」をどのように育成し、人材をどのように確保していくのかは、重要な課題であると考へる。また、多言語活動は言語を学ぶための共通の学びではあるが、このような「ことばについての学び」がまだ外国語教育として十分認知されていない。教育の場での実践を繰り返しながら、成果を報告しつつ具体的な教育プログラムの構築に向けて、今後も継続して研究していきたい。

<sup>1</sup> Akihiko Morita (2019) Human Rights education at the Digital/Global Age. Human Rights Education in Asia-Pacific, Vol.9

<sup>2</sup> 言語交流研究所の「多言語活動」では、物語や歌のオリジナル多言語音源を使い、様々な言語が日常的に聞こえてくる環境と多言語に親しむための活動の場をつくり、多言語に慣れ親しむ活動を行っている。

<sup>3</sup> 榎原陽 (2013) 『ことばはボクらの音楽だ!』, 明治書院 (榎原陽 (1985, 増補版 1989))